

2歳児クラスにおける保育者相互の対話を通じた 保育計画づくりと実践のふりかえり

富田 昌平

保育を計画し、実践し、実践をふりかえり、計画を見直し、また新たな実践を創造するという保育の営みにおいて、保育者相互の対話の積み重ねが重要であることは言うまでもない。本稿では、ある2歳児クラスにおける1年間の取り組みの様子を様々な記録やインタビューを通して仮想的に再現し、それにより、保育計画づくりと実践のふりかえりにおける保育者相互の対話の重要性について考察を深める。

キーワード：保育者相互の対話、保育計画づくり、実践のふりかえり、2歳児クラス

1. はじめに

2歳から3歳の時期は、一般に「第一反抗期」とされ、「Terrible two」「魔の2歳児」「恐るべき2歳児」などの言葉もあるように、まわりの大人たちにとってみると非常に厄介で手に負えない時期である。事実、この時期は、全身運動や手指の操作をはじめとする運動面の発達や、イメージや言語をはじめとする認識面の発達から得られる「喜び」や「希望」を基盤に、芽生え始めたばかりの自我が豊かにふくらんでいく時期であり、それにより様々な矛盾や葛藤を抱える時期である。何でもやりたがる姿を見せるかと思えば、何でも拒否して甘える姿を見せ、そうかと思うと、何ともノリが良い姿を見せてまわりの大人たちを喜ばせたりもする。このように多面的で捉えどころのない姿を見せるのが、2歳から3歳の時期の特徴であると言えよう（富田，2012）。

従って、2歳児クラスの保育においては、こうした2、3歳の発達の姿をよく理解したうえで、一人ひとりの自我の世界をていねいに受け止め、切り替えしながら、それぞれの自我世界の出口にうまく誘ってやる必要がある。決して子どもに思うままに振る舞う自由を保障するのではなく、「あなたの要求を思うように表現していいんだよ」という関係を前提としながら、そこで表現された自我世界と親や保育者の教育要求との間に、2歳児にふさわしい接点をつくり出していくことが大切なのである（加藤，1997）。そのためには、日々の遊びや生活において子どもの行動をよく見、その背景にある思いに目を向け、ていねいに応えるという「子どもとの対話」に加えて、保育者同士がそれぞれの目で見えた子どもの姿を伝え合い、ともに考え、語り合うことを通じて子どもの本当の思いに近づいていくという「保育者相互の対話」が極めて重要となる。

そこで本稿では、ある2歳児クラスにおける1年間の取り組みを取り上げながら、保育の計画づくりと実践のふりかえりにおける保育者相互の対話の重要性について考察することを目的とする。具体的には、保育者相互の対話を通して保育を計画し、実践し、実践をふりかえり、計画を見直し、また新たな実践を創造するという営みを長年にわたって重視してきた、K保育園の2歳児クラスにおける1年間の取り組みの様子を、当時の様々な記録（年間保育計画、月案、週案、保育日誌、月例のクラス会議議事録、半期総括会議議事録、総括会議議事録など）とふり返りのインタビューをもとに仮想的に再現し、それにより、保育計画づくりと実践のふりかえりにおける保育者相互の対話の重要性について考察を深めたい。

2. 新年度のはじまりにあたって

K保育園は、政令指定都市の中心部に位置する、当時定員60名の小さな園である（現在は改築し、定員も90名である）。2歳児クラス担任のT先生は、当時保育者歴8年目、2歳児クラス担任歴4年目であり、現在はK保育園の園長を務めている。もう一人の担任保育者F先生は保育者歴2年目であるが、K保育園での勤務はこの年が初めてである。基本的には、T先生が主であり、F先生が副という位置づけである。

4月最初のクラス会議では、まず、2歳児クラスの子どもの像について保育者相互に意見を出し合い、確認し合った。以下は、そこで話し合われた2歳児クラスの子どもの像の内容である。

- 2歳児では、身の回りのことを自分でしようとする姿が見られ始める。
- それにより自分の力で心地よい生活を送ることができるようになる。
- いろいろなことに興味を持ってかかわり、感情豊かに

表現できるようになる。

- 友達を求め、自由遊びの時間など保育士の介入なしでも短時間2～3人で遊ぶことができるようになる。
- 一人ひとりに声かけをしなくても、みんなで行動する姿が見られるようになる。

こうした2歳児の子ども像をふまえ、クラスとして年間を通して大切にすることとして「意欲を育てる―甘えを受け入れ、自立を促す―」をテーマに掲げて取り組むことにした。このテーマを年度の初めに掲げるにあたって、担任保育者2人で「意欲を育てる」とはいったいどういうことか、具体的にはどうすればよいのかについて、様々な文献を参考にしながら考え、話し合ったという。

T:「やっぱり子どもたちの『ジブンデ』という思い、これ大切にしていくことが一番かなあと思うんだけど、どう思う？」

F:「そうですね、私もそれが大事だと思います」

T:「で、問題は『自我』なんだけど、この本の中にはね、『自我とは何かにこだわっているジブン』ってあるのよ。だとすると、子どもたちの中の『ジブン』をしっかり保障していくことが、結果的に『ジブンデ』という思いを強くすることにつながるんじゃないかなあと思うのよね」

F:「なるほど」

T:「だから、『ジブン』を保障していくことが大事なんだけど…、そのためにはどうしたらよいと思う？」

F:「うーん…。そうですねえ…」

T:「私が思うにはね、やっぱり子どもたちがこだわりを持つ順序っていうのを考えると、まずは私たち大人が子どもの心のよりどころになることが大切なんじゃないかなあと思うのよね。そうして、私たちが子どもにとっての心のよりどころになったうえで、保育者―子ども―モノという三項関係の中で、子どもたちがモノと関わってそれを変化させて、そこに喜びを感じたときにしっかり共感していくっていうことが大切かなあって。そうしてくり返し遊ぶ中で、子どもの中にも自ずとこだわりみたいなものが出てくるだろうし、自己充実の感覚も芽生えてくるだろうし、『ジブンデしたい!』っていう思いも生まれてくるんじゃないかなあって思うのね。そんな風にして子どもたちがこだわりを持ってくり返し遊ぶ姿を大切にしていきたいなあって思うんだけど、F先生はどう思う？」

F:「そうですね。やっぱりまだ2歳ですし、大人との関係が大事だと思うんで、まずはそこでしっかりと信頼関係を築いていくっていうのは大切かなあと思います。で、そのうえで、子どもがモノと向き合っ

たときにはしっかり共感してやるっていうのが大切なあと、私も思います」

以上のような対話の結果、「私たちがまず子どもの心のよりどころとなろう」をクラス方針の1つとし、そのために「新しいクラス、保育者に慣れる」ことを期間目標として掲げることにした。2人の対話はまだまだ続く。

T:「あとね、気になるのは遊びなんだけど、やっぱり子どもたち一人ひとりが遊びの中で満足できるように保障していくことが大切じゃないかなあって思うのね。遊びの中での満足が保障されると、それが自己充実につながって、自己充実できると外の世界にも次第に目が向くようになるんじゃないかなあって。その点はどう思う？」

F:「はい。いいと思います」

T:「でね。保育者の側からしてみると、やっぱりついクラス全体が落ち着くようにとか、トラブルができるだけないようにってことを優先的に考えてしまっただけで、一人ひとりにとってどうかというよりも、とにかくみんなで遊べるかどうかっていうのを基準に遊びを選んでしまいがちじゃない？ そうではなくて、まずは保育者自身が焦らずゆったりと構えて、その日とにかく2人でも3人でもいいから、その子どもたちが本当に満足して『あー、楽しかった!』と思えるような保育をしていくことが大切じゃないかなあって思うのよね。で、F先生って、自由遊びの時とかの様子を見てみると、まだなんていうか、子どもたちとどう遊んだらいいかわからないっていう感じがあるよね？」

F:「あ、わかります？ そうなんです。いまいちど遊んだらいいかわからなくて、それがちょっと悩みの種です」

T:「だからね、F先生の場合、見てるとまだどこかに、こう言ったらなんだけど、『遊んであげる』って感じがあるわけ。でもね、そんな感じで子どもと接していくと、逆にしんどいっていうか…。ほら、どうしても構えちゃうでしょう、こっちが。構えちゃうとしんどいのよ。そうじゃなくって、やっぱり保育者が楽しむことが大事じゃないかなあって私は思うわけ。子どもと遊ぶときにも、まずは自分が『楽しいな』とか『面白いなあー』とか思えるもので遊んでみて、そうして保育者が楽しそうにしていたら、子どもたちも自然と寄ってきて、自分も一緒に遊んでみたいなあって思うんじゃないかなって思うのよね。とにかく、まずは保育者が楽しく遊んで見せて、子どもに興味を持たせて、『やってみたいな』っていう気持ちを子どもの中に積み上げていくことが大事だ

と思うのよね。そうすることで遊びも少しずつ広がって
いくだろうし、それが結果的に『あー、楽しかった！』
って思える保育につながっていくんじゃないかなあ」

F:「なるほど。保育者がまず楽しむことが大事ってこ
とですね。わかりました。ちょっとやってみます」

以上のような対話を通して、「その日、2人でも3人
でも、本当に楽しかったと思える遊びを保障していこう」
を2つめのクラス方針とし、「子ども一人ひとりが好き
な遊びを見つけて、遊びの楽しさを実感する」を期間目
標として掲げることにした。その他にも、以下のような
ことを確認し合った。

- ・子どもたちの姿の中で、「ダメよ」と言ってしまうそ
うなことはよくあるが、生活や遊びの工夫次第で、叱
らなくてもすむことはたくさんある。日々の生活や遊
びの中で子どもたちをできるだけ叱らずにすむように、
工夫を重ねていこう。
- ・子どもの内面にある意欲は目に見えにくいから、どう
保育者自身が見ていけばよいか不安になる。子どもへ
の対応について不安に思ったりお互いの対応でよくわ
からないことがあった時には、とにかく尋ねていこう。
- ・子どもの行動を否定的に見ずに、あくまでも「待てる
よ」という気持ちを子どもたちに素直に伝えていこう。
- ・子どもの姿がバラバラに見えても（落ち着いていなく
ても）、年明けの頃には変わるだろうとの見通しを持っ
て、互いに励まし合ってやっていこう。
- ・設定保育は「必ずみんなでする」というのではなく、
他の遊びも用意して「やりたい子だけでやってみよう」
という感じですすめていこう。やりたい子の姿を知ら
せる中で、やりたくなったらやらせてみるという感じ
ですすめていこう。

このように4月初めの担任同士の対話を通して、2歳
児クラスの一年間で大切にしたいテーマやクラス方針、
期間目標、日常の保育の中で特に心がけたいことなどが
決められていった。

3. 子どもたちの姿や日々の保育をふり返る

4月の保育が終わった時点でもう一度クラス会議を開
き、そこで子どもたちの現在の姿を確認し合い、5月以
降の保育の課題や留意すべきことを整理していくことに
した。子どもたちの姿をふり返っていく中で、「なぜ？」
「どうして？」という疑問が次から次へと湧き出てくる。
そうした疑問に対して、「もしかするとこういうことじゃ
ないかな？」「こうするともっとよくなるんじゃないか
な？」という仮説を自分たちなりに考えて、意見を出し

合い、具体的な取り組み方法について考えていった。

例えば、生活面の一つである食事場面では、次のよう
な子どもたちの姿が確認された。

偏食もあり、なかなか意欲的に食べられない子が多く
見られる。食事の態度も、スプーンで食器を叩く子、イ
スの上に正座する子、口の中に食べ物が入っていてもご
ちそうさまをしたり、立ち歩いてしまう子などがある。

こうした子どもたちの姿に対して、どうしたら楽しく
意欲的に食べることができるか、どうしたら落ち着いて
食べることができるか、その原因と方法を対話の中で探っ
ていく。その結果、次の点に留意してかかわり方や環境
を工夫していこうという話になったという。

- ・子どもたちの姿をできるだけ細かくつかむようにし、
子どもたちの様子を見ながら、「させる」のではなく
「自らできる」ような対応を少しずつ考えていくこと。
- ・生活全般にわたって楽しい雰囲気、楽しい見通しを大
切にしていく中で、「自分から」という思いを育てて
いくこと。
- ・「大きいから」とか「〇〇できるんよなー」と声をか
けるのではなく、「できる」けれど「甘えたい」とい
う時があることを理解し、「手伝って」と子どもが言っ
てきたときには、その気持ちを受け止めるようにする
こと（自分を丸ごと出せる保育者の存在をつくってい
くこと）。
- ・「ジブンデ」という気持ちが芽生えている子には待っ
てあげることを大切にし、できたときには一緒に喜び
合って、次の意欲へとつなげていくこと。
- ・うまくいかなかったりしたとき、まずはその子の気持
を受け止めてやり、「〇〇したかったけど、××になっ
たねえ」と対応し、本人の思いを受け止めた後、他児
や保育者の思いを伝え、少しでも納得できるよう配慮
していくこと。

こうしたことは、排泄や着脱、睡眠、生活リズムなど、
そのほかの生活の側面にも当てはまる。例えば、排泄に
関して言えば、最初の頃は保育者が「おしっこに行こう」
と誘っても、今している遊びや活動から離れたくないた
め、なかなか来てくれない。そして、その場では「でな
い」と言い、結局後になって「おしっこ！」と言いつ
つ出てきて、活動が途切れてしまうなどといったことがよくある。
こんな場合にも、「楽しい雰囲気、楽しい見通しを大切
にしていく」ことが重要だと話し合った。つまり、楽し
い見通しをあらかじめ持たせることができたなら（例えば、
楽しい遊びの前に誘うなどすれば）、「おしっこに行く」
ことも受け入れやすくなると考えられるのである。

また、着脱に関しても、4月のこの時期、自分でできる子も中にはいるが、まだまだ大人が見守るだけでは難しく、手伝ってほしいという姿を見せる子が多くみられる。ほとんどの子において1対1か1対2の対応が必要となるが、これに関しても、「『できる』けれど『甘えたい』という時がある」ことを十分に理解して、保育者になるべくゆったりと関わることができるよう、生活の流れを早めるなどして着脱の時間をたっぷり取れるように配慮しようという話になったという。

このように保育者は対話を通して子どもたちの現在の姿を確認し、課題や留意すべき点を整理して、明日からの保育に向けて新たな実践を創造していくのである。

4. ちょっとしたことでも話し合う

その後も2歳児クラスでは、日々の保育の中で疑問に思ったこと、悩んだこと、困ったことなどについて気軽に話し合っていた。

例えば、おやつ時間、保育者が「おやつにするよー」と声をかけると、すぐに集まる子もいれば、遊び続けてなかなか集まらない子もいる。最初のうちは、みんな一緒に「いただきます」することが大事との思いから、早く来た子たちに待ってもらっていた。しかし、早く来た子たちのことを考えると、「おやつを食べたい」という要求があって早くに座っているはずなのに、遊び続けている子たちが来るまで待っていると時間もたち、結局早く用意しても遊び続けていても同じことになるというのではおかしいのではないか、という話になった。担任同士で話し合った結果、早く来た子たちには先に「いただきます」をしてもらい、遊び続けている子たちにもその姿を気づかせ、見通しを持たせやすくすることにしよう。大切なのは「みんなで一緒」ではなく、一人ひとりが満足できること。遊び続けている子たちにとっても、本人がしたくなる（自ら食べに来たくなる）ことが大切であって、保育者がいろいろ言うよりはよいのではないかと、という話になったそうである。

また、給食で自分の嫌いなものが出たとき、食べる前から「これいらん！」と言う子がいる。こんなときどうすればよいかという悩みに対しては、「これいらん！」と言っても、いらぬものにも目を向けてほしいし、食べたくなくても「こんなにおいしいんだ！」と実感してほしい、だから、少しだけつぐとか、保育者が「あとでどうしても食べられなかったら、手伝ってあげるね」などと対応することが大切ではないか、という話になった。

さらに、お昼寝の時に保育者がとんとんしたり近くに行ったりすると、「とんとんせんで！」「来ないで！」と言う子がいる。言われるがままに何もしないでよいものかどうか、というのが悩み。これに対しては、「もう3

歳だもん！」という自立に向けての思いの一方で、まだまだ甘えたいという思いもあるはずで、そうした思いがストレートに出せないのであれば、出せるように対応していく必要があるのではないかという話になったそうである。具体的には、「来ないで！」と言われる前に、「となりの〇〇ちゃんを寝かせてあげたいから、ここに座らせてね」と断ってからそばにいてあげるとか、「〇〇ではない△△だ」を使って、「こっちじゃなくて、ここなら座ってもいい？」という仕方、付いていてあげるといいのではないかと、という話になった。

いずれの疑問や悩みも、「意欲を育てるー甘えを受け入れ、自立を促すー」という年間テーマに沿うものばかりであり、子どもの「ジブンデ」や「〇〇したい」という明日に向けての意欲を育てていくうえで、ていねいに関わっていくことの大切さが改めて確認されたと言えよう。

5. 半期の総括を通して保育を見直す

10月になると、半期の総括会議が行われた。担任同士による半期総括会議では、年間を通して大切にしたいテーマやクラスの方針を中心に、取り組みの成果がどうであったかが話し合われた。

まず、「意欲を育てるー甘えを受け入れ、自立を促すー」という年間テーマに関するところで、「子どもたちの行動・自己主張を否定的に見ず、受けとめてやれたらどうか？」という点について話し合いが行われた。

T:「まず、年間テーマに関するところで、『子どもたちの行動・自己主張を否定的に見ず、受けとめてやれたらどうか?』という点で話し合ってみただけで、どうだったかな? この点に関しては、とにかく子どもの行動をどうとらえたらよいかについて、2人で話し合う機会をずいぶんつくったよね(笑)」

F:「そうですね。結構話しましたよね(笑)」

T:「否定的に見ずに受け止めるって意味では、一つには「ダメ!」という言葉で否定するのではなく、子どもが自ら気持ちを切り替えていけるようにしていくことが大事っていうのがあると思うんだけど、そのために、例えば、『F先生とする? T先生とする?』とか、『手伝ってあげようか?それとも自分でやってみる?』という具合に、子どもに自ら選択させる機会を与えることで、自分で切り替えられるように促していったっていうのはあるよね。あと、子どもの世界に保育者もいっしょに入り込んで共感してやると、気持ちも切り替えやすくなるかと」

F:「私はMちゃんとのことが印象に残っているんですけど、Mちゃんが砂場で夢中になって遊んでて、その時にお片付けの時間がきたんですよ。で、私

が「入ろう、Mちゃん。みんな入っとるよ」って声をかけるんですけど、知らんぷりで。Mちゃんって、私からしてみるとちょっととっつきにくいところがあって、どうしたもんかなあーとその時は思ったんですよ。でも、夢中になって遊んでいる姿を見ていて、その砂場でつくっているものにはMちゃんりのこだわりがあるんだろなあと思って、すべては打ち切らずに少しでも残してあげる方向で考えることにしたんですよ。で、「それ、冷蔵庫に入れとく？」って声をかけたんですよ。そしたら、「うん！」って、なんだかすごく納得できた様子で。それですんなり部屋の中に入ることができたんですよ。この出来事から、やっぱり「ダメ」とか否定的にかかわるんじゃなくて、うまく切り替えができるようにかかわっていくことが大事だなあって改めて思いましたね」

T:「うーん、なるほど。でも、クラス全体をふり返ると、わりと自分で何でもできるような子とか、要求が弱い子に対しては、どうかかわってよいか、結構対応が難しかったよね。あと、受けとめるっていうのはそれなりにできても、どう自立させるかというところまでは、ちょっとまだ私たちの側も十分に理解しきれていなかったかなあっていうのは反省材料。その点については、2人の間でも十分に意思統一ができていなかったし。でも、『甘えを受け入れる』っていう点はしっかりと意識してこれたし、取り組みの中で子どもの変化を確認できたことは、よかったかなとは思うけど」

次に、「子どもたち一人一人が満足して生活したり、遊べたりできたかどうか？」という問題に話は移っていった。中でも、「保育室の空間の工夫、おもちゃの工夫はどうだったか？」「その日、二人でも三人でも、本当に楽しかったと思える遊びを保障できたかどうか？」という点について、以下のように話し合いが進められた。

T:「保育室の空間の工夫としては、まず、食べるところ、遊ぶところ、午睡をするところを分けたことで、見通しが持ちやすくなったよね」

F:「そうですね。あと、部屋の中にコーナーを作って、一定の遊ぶ場所を決めておくことで、それぞれの遊びをそれなりに保障することができたっていうのはありますよね」

T:「うん。それから、ごっこの世界を楽しくするための取り組みとして、おもちゃの工夫もしたよね。例えば、ロープやお手玉、リング、ハンカチ、木のリングみたいに、一つのおもちゃでもいろいろと変化させて遊べるような教材をなるべく用意したり、弁

当箱や野菜、果物、本物の野菜とか、見立てやすいおもちゃでイメージを助ける教材を用意したり。やってみての感想はどう？」

F:「感想ですか。そうですね。一つは、空間を区切ることで、子どもたちの見通しが持たせやすくなったかなっていうのはありますね。それと、コーナーを作ったことで自分で遊びを選べるようになったことはよかったかなって思います。コーナーにしても最終的には空間的に狭いこともあって、ぐちゃぐちゃになることも多かったけど、でも、狭い中でも子どもたちがお互いに意識し合うことで、互いの遊びの大切さは伝わっていったんじゃないかなって思います」

T:「それはあるよね。このごっこの教材の充実は、後半からも特に大切にしていきたい点だね。教材が充実していると、子どもたちもすぐなりきって遊ぶことができるし。教材があまり充実していないときには、子どもたちもどうしても遊びをリードしてくれる子について回ったり、ボーっとしてる子が多かったりしたけど、そういう子がだんだん減っていった印象はあるよね。程度にいろいろ違いはあるけど、その子なりにじっくりものと関わって、変化させたり、繰り返し遊ぶ姿が見られるようになったことはよかったかなあって」

F:「はい」

T:「それから次に、『その日、二人でも三人でも、本当に楽しかったと思える遊びを保障できたかどうか？』っていうことだけど、どうかなあ？ 取り組みとしては、みんなで一斉に主たる活動を行うんじゃなくて、他の遊びもいくつか用意して、やりたい子ができるようにしていったっていうのがあるけど。あと、やりたくない子には、それに取り組んでいる友達の姿に気づかせる雰囲気をつくりながら、あくまでも自らやりたいって思えるように、そして参加していただけるように心がけたっていうのはあるよね」

F:「そうですね。参加している友達の姿に自分で気づいていけるように、そういう雰囲気をつくるっていうのは、特に気を付けた点ですよ。その場合にも、『参加しないといけない』っていう無言の圧力というか、そういう雰囲気にはならないようにと、一方で気を付けましたし。あと、別の遊びを通して自信を持つことで、今まで参加しようとしなかった遊びにも自ら参加できるようになったっていう姿もありましたよね」

以上のように、半期の総括会議では、年間を通して大切にしたいテーマやクラス方針、期間目標などをもとに、前半期の子どもの姿や保育を振り返り、そして気になる

点や問題点などはその都度出し合いながら、話し合いを進めていく。これらは、自分たちの日々の保育を見直す重要な機会になることはもちろんのこと、子ども観や発達観、保育観などを保育者相互で確認・整理し合い、後半期の保育へとつなげていく作業ともなるのである。

6. 対話の歴史が園の文化を生む

以上、K 保育園の2歳児クラスにおける1年間の取り組みの様子を見てきた。保育計画づくりと実践のふりかえりにおいて保育者相互の対話がきわめて重要な役割を担っていることを、改めて確認できたのではなかろうか。

K 保育園では開園以来、「一人ひとりを大切にする保育」を目指して実践に取り組んできたという。当時の園長先生は、「子どもにいいことだったら何をしていた」と全職員に伝え、とにかく子どもも保育者もやりたいことをやる、その中で見つかった課題については自分たちで研究し、自分たちで解決していく、それが園のモットーだった。しかし一方で、子どもたちに目を向けると、集団で過ごしながらも一人ひとりをはんでバラバラで、小学校からも「K 保育園の子どもたちは落ち着きがない」と指摘される。「一人ひとりを大切にする」と言いながら、こんなことでいいのか？ 果たして集団保育と言えるのか？ どうしたら本当の意味で「一人ひとりを大切にする保育」を実現できるのか？ 「受けとめる」とはいったい何か？ 子どものやりたいことを「受けとめる」だけでいいのか？ 当時は日々の子どもの姿や保育について話し合うだけでなく、職員同士でいろんな本を読み、どう感じたか互いに意見を出し合いながら、徹底的に話し合いを積み重ねていったという。そうした中で、とにかく自分たちでできること、自分たちで納得できたことから始めていこうということで、試行錯誤しながら自分たちの保育をつくり上げていったそうである。

T 先生は、「一人ひとりを大切にする保育」とは、「一人ひとりの育ちにじっくりとていねいに向き合う保育」であるとし、次のように述べている。

「子どもの自我を育てるということは、子どものありのままの感情を表現させるだけでなく、幼い頃から子ども自身が自らの心のありようを大人に言葉でていねいに表現され、自分の思いに気づいていくことによって可能になります。相手には自分と異なる思いがあり、その自分と相手という異なる2つの思いを子ども自らが選び、納得して受け入れていく、そうした力を育てることこそが大切なのだと思います。そのことを私たちは、後の実践や学習から学びとりました。」

K 保育園では、現在も子どもとの対話、保育者相互の対話を重視した保育計画づくりと実践のふりかえりが続けられている。しかし、今後はこうして積み上げてきた園の文化を若い世代にどのように引き継いでいくかが課題であると言えよう。

引用文献

- 1) 加藤繁美 子どもの自分づくりと保育の構造 ひとなる書房 1997年
- 2) 富田昌平 子どもとつくる2歳児保育 ひとなる書房 2012年

参考文献

- 1) 保育計画研究会編 実践に学ぶ保育計画のつくり方・いかし方 ひとなる書房 2004年
- 2) 神田英雄 0歳から3歳：保育・子育てと発達研究をむすぶ 草土文化 1997年
- 3) 神田英雄 伝わる心がめばえるころ：二歳児の世界 かもがわ出版 2004年
- 4) 加藤繁美 対話的保育カリキュラム（上）：理論と構造 ひとなる書房 2007年
- 5) 加藤繁美 対話的保育カリキュラム（下）：実践の展開 ひとなる書房 2008年
- 6) 加用美代子 二歳児の発達と生活・遊び. 全国保育団体連絡会編 自我がふくらむ楽しい暮らし（pp.52-64） ちいさいなかま社 2008年
- 7) 高浜介二・秋葉英則・横田昌子監修 年齢別保育講座：2歳児の保育 あゆみ出版 1984年
- 8) ワロン, H. 身体・自我・社会（浜田寿美男, 訳編）ミネルヴァ書房（原著 1938～56年）1983年

謝 辞

日々の保育で大変お忙しい中、たくさんの貴重な資料を提供し、インタビューに応じてくださったT先生、およびK 保育園の先生方に深く感謝申し上げます。